歌合 乾元二年五月

一番 夏夜 左勝

女房

ふけぬるかくらき砌のみづのおとに

枕涼しきうたたたねのとこ

右

藤大納言典侍

まがひつるほたるもほしも影きえて

くまなき月のさしのぼる空

左歌、姿さはやかに、詞めづらしく、古集の心もかよひて難
及之由、満座一同申之、右歌も景気見るこちして、艶に侍
れども、左にはおよぶべからざるよし、各定め申畢

十番 左勝

中将

月もなきあま夜のそらの明がたに

ほたるのかげそのきにほのめく

右

従三位親子

みじかさようたたねながら見る月の

よひとつおもふに鐘のきこゆる

左歌、心詞優美にして、初終とどこほり侍らず、
秀逸の由、満座申之、右、又いひ知りて興ある
さまに侍れども、左猶艶に侍れば、可為勝之由
定め侍りき